

## 第2回 北しりべし定住自立圏共生ビジョン懇談会 会議録（概要版）

日 時 平成26年12月1日（火）15:00～17:00

場 所 小樽市役所 別館3階 第1委員会室

出席委員（名簿順） 李会長、並木委員、伊澤委員、白岩委員、寺下委員、鎌田委員、菊地委員  
山田委員、津嘉田委員、佐藤委員、樋口オブザーバー

欠席委員（同上） 阿久津委員、平松委員、小川原委員、久郷委員、岡司委員

### 1 開 会

李会長の司会で進行

### 2 議 事 「第2次北しりべし定住自立圏共生ビジョン（素案）について」

安部主幹から一括説明

- ① 事務局での素案づくりの進め方について
- ② 素案における具体的な取組の主な変更点について（資料1・資料2）
- ③ 素案における構成の見直しについて（資料3）
- ④ 素案の概要確認（資料4）
- ⑤ 今後の進め方・スケジュールについて
- ⑥ その他（会議録のホームページ公開について）

#### 【質疑応答】

伊澤委員 地域経済が疲弊していることに加え、流通形態も変化していることから、従来の販路が確保できなくなってきている。北しりべしは食料自給率が高いことから、圏域の農水産物や加工食品が売りだと思うが、小売業や卸売業が半減している現状で、地域で雇用を生み出すには、川下にあたる販売にも力を入れるべきだ。圏域内での消費を促し、圏域外に売り込んでいくためには、販売拠点づくりが不可欠だ（「ゆるキャラ」を活用した売り込みにもニーズあり）。

また、衣料品業界ではSPA（Specialty store retailer of Private label Apparel）という、生産者が販売するビジネスモデルが当たり前になっているが、北しりべし版SPAの発想も必要だと思う。

北しりべしには年間1,000万人もの観光入込があるが、圏域内でうまく循環しておらず、毎年1,000万人もの社会減による人口減少が続いている現状だ。世界無形文化財（和食）・世界文化遺産（富士山）・世界遺産（富岡製糸工場）だけでなく、沼津港深海水族館のように地域の観光資源を見直すと、オンリーワンなものもあるのではないかと。北海道（後志）は鉄道や港湾とともに栄えた歴史があり、小樽市総合博物館（旧鉄道記念館）の機関車庫やラッセル車などの展示

は、全国どこにもない北海道特有のものだ。こうした明治以降の近代産業遺産と、観光を結びつけることで人を動かし、地域にお金を落とす新たな切り口が必要だ。

並木委員 圏域の医療機関が ICT を導入するとなると、かなりの費用がかかるのが実情なので、普及にあたっては財政的な裏づけが不可欠だ。小樽市内 10 ヶ所の医療機関が参加する「ID-Link（地域医療連携システム）」も、当病院の研究費で導入費用を負担している現状である。それで例えば余市協会病院にサーバーを導入するということになれば、予算の問題も関わってくる。

新小樽市立病院の夜間救急体制は 3 名で行い、2 次救急患者に十分対応できるように配慮している。一方関係機関との連携体制を維持するため、救急隊員の教育も重要であると考えている。

観光と医療の関連でいえば、小樽市立病院が新たに PET（Positron Emission Tomography（陽電子放出断層撮影））を導入したことから、現在小樽商科大学とメディカルツーリズムの研究をしている。特に外国人は日本の高度医療を受けたがっているので、検診・宿泊・観光とセットで実施できる可能性がある。

白岩委員 実際に 6 市町村が連携する難しさは理解するが、圏域住民が小樽の介護施設を利用している実態もある一方で、ビジョン素案を見た限りでは、福祉分野の取組が特に少ないと感じる。

日常生活自立支援事業に関連した取組について、小樽市での実施や圏域での連携が困難とあるが、同事業は地域の社会福祉協議会が連携し、平成 27 年度から取り組むことが決まっているので、ビジョンに掲載してもよいのではないか。

そもそも日常生活自立支援事業と成年後見制度は、セットで実施するほうが良いという考え方もあり、介護保険制度や国民健康保険制度については、都道府県移管など大きな制度改革がある可能性がある。第 2 次共生ビジョンの期間である 5 年間のうちに、協定書内容の変更についても考えるべきだ。

寺下委員 圏域内の公立・公的病院が連携するため、ネットワークを構築する必要があると思う。お互いの機能を補完するため、圏域内の病院長（責任者）が定期的に来ると良いのではないか。

ビジョン素案は美しい文章になっているが、現実と乖離している部分がある。もう少しテーマを絞ったうえで、懇談会委員も人選すべきだと思ふ。

社会減については若者が要因と思われるので、若者の雇用促進や新規起業を支援する必要がある。余市町に新たなワイナリーができており、ワイン醸造を学ぶ学校を作る動きもあるようだが、このような取組を支援するには、6 次産業化の知識なども必要になるので、行政として明確な考えも必要だと思ふ。

鎌田委員 圏域内の公立・公的病院はもちろん、個人病院も含めた連携が重要だと思ふ。患者は病院を選べるものの、医療に関する知識がほとんどないので、症例に見合った病院が判るだけでもありがたい。患者目線で医療機関が連携することが

必要ではないか。

観光について言えば、小樽発で北しりべしを巡るツアーの企画など、行政としてもっと積極的に関わるべきだと思う。

菊地委員 地域福祉に関する記載が簡潔すぎる感はあるものの、人口減少対策で経済・産業分野の優先順位が高いことについて、ある程度理解はしているつもりだ。地域のコミュニティ再生にあたっては、コミュニティ内の経済が重要で、東北（被災地）の例では漁業を中心に復活しつつあるが、圏域の特性を活かして商業を中心に据える考えもあると思う。

また、福祉は教育とも関係があるので、ビジョン素案に織り込んでどうか。

山田委員 小樽協会病院が新規分娩の受入を休止したが、少子化の問題もあることから、周産期医療体制を確保する必要がある。管内でほかに周産期医療に対応できるのは、倶知安厚生病院しかないので、圏域の周産期医療を確保するには、協会病院と小樽レディースクリニックを支援するしかない。圏域住民は小樽の医療機関に頼っている現状なので、子どもを産める環境づくりを盛り込んでもらいたい。

津嘉田委員 懇談会のメンバーは上の世代の人ばかりなので、若い世代の意見を聞かなければ、実際に取組が進まないと思われる。行政主導で進めるのではなく、商店街関係者や企業の意見を聞く必要があるのではないか（鎌田委員もこれに賛同）。

佐藤委員 共生ビジョンが実現するよう、行政などに任せっきりにするのではなく、自分達のできることから進めると良いと思う。NHKの連続テレビ小説「マッサン」はチャンスと捉えている。余市町が知名度を高めるなかで、北しりべしを知ってもらうことが大切なので、赤井川観光協会も行動を起こさなければいけない。

樋口専門官 地域公共交通に関する2つの事業があるが、「生活路線バス運行事業」は小樽市と5町村を結ぶ地域間バス路線、「多様な交通手段の維持及び検討事業」は5町村内における移動手段を指すと思われる。「生活路線バス運行事業」に利用実態の把握という記載があるが、住民にアンケートを実施すると恐らく、町村内でのアクセスが悪いという結果になると思われるので、2事業は一緒に考えていかなければならないだろう。

李会長 北しりべし圏域における定住を促すため、雇用を生むため積極的な姿勢を示す必要があるのではないか。第2次共生ビジョンの5年間のうちに、何らか具体的な取組を盛り込み、これを検討するためのワーキンググループを設け、アクションプランを作ると良い。ワーキンググループのメンバーは、懇談会委員だけでなく、若者や活動の担い手を加えるべきだと思う。

地域医療については連携が進んでいない現状のようだが、電子カルテの導入など、取り組みやすいところから着手するという考え方もある。日本の医療は先進国でもトップクラスなので、小樽病院のPETを軸としたメディカルツーリズムにより、東南アジア諸国から小樽に治療に来てもらい、域内観光で連携することができれば、強みである観光に結びつけることができる。

- いずれにせよ、経営学の観点でいうところの、顧客目線での取組が必要と思う。
- 伊澤委員 事業主体や分野によって、事業の進め方が異なるので、第2次共生ビジョンの5年間における工程表が必要だ（住民会議において検討するという案あり）。
- 李会長 新たな取組だけでなく継続する取組もあるので、社会環境が変化する中で優先順位を示し、どう行動すべきか道筋をつける必要がある。
- 寺下委員 ビジョン素案に客観的（抽象的）な記載が多いが、本気で取り組むというのであれば、数値化しないと足並みが揃わないのではないか。
- 鎌田委員 企業でいう10カ年計画のように、進捗状況が確認できると良いと思う。
- 伊澤委員 まず圏域6市町村の情報共有と意識改革が必要だ。住民が意識を向けてくれないと、我々事業者も個別の取組に注力していけないので、圏域内のコミュニケーションが必要だろう。

### 3 その他

今後のスケジュールについて事務局（安部主幹）より説明

小樽市が1月に実施するパブリックコメントに向け、12月中に共生ビジョン素案の修正案をお送りするので、書面で委員の了承を得たいと考えている。パブリックコメントでいただいた意見を集約し、2月には共生ビジョンの最終案をお示ししたい。

### 4 閉 会